

# 『食糧の帝国—食物が決定づけた文明の勃興と崩壊』

エヴァン・D・G・フレイザー、アンドリュー・リマス著、  
藤井美佐子訳

食料・環境領域 主任研究官 古橋 元



『食糧の帝国—食物が決定づけた文明の勃興と崩壊』

著者／エヴァン・D・G・フレイ  
ザー、アンドリュー・リマス著、  
藤井美佐子訳  
出版年／2013年2月  
発行所／太田出版

マルサスは『人口論』の中で、命題の一つとして「人口は等比級数的に増加するが、食糧は等差級数的にしかならない」と述べ、人口と食糧の増加の関係における避けがたい差異が生じることから、貧困問題等を論じています。フェルディナンド・マゼランの艦隊が史上初の世界一周を成し遂げて約70年過ぎた16世紀末から17世紀初頭にかけて、世界を一周したフィレンツェ生まれの商人、フランチェスコ・カルレッティが著した回想録『世界周遊記』の記述を軸に、本書は、文明が起こった5000年前から近代および現代の中を飛翔し、食糧に関わる歴史的なモノおよび出来事を俯瞰して、その歴史的な視点で、現代が依存する食糧生産・交易システムに警句を鳴らしています。

『世界周遊記』のカルレッティは特段、義侠心や野望に富んでいた訳でもなく、回想録に俗人的な回想も多々みられるが、食に関する詳細な記述も多く、商いで世界を一周して、多様な食物についての経験を記録したようです。また、『世界周遊記』は世界的に有名ということでもなく、日本でもあまり注目されてはいませんが、当時の世界食紀行の側面を備えていたようです。カルレッティは、地中海から西アフリカ沖のカーボヴェルデ諸島を経由して大西洋を渡り、パナマから太平洋に移動し、ペルーのリマ、メキシコを経由して、マニラ、そして、安土桃山時代の豊臣秀吉統治下の日本の長崎にも帰港しました。マカオ、マラッカを経由し、インドのゴアに寄り、アフリカの南を通過して、セントヘレナ島等からオランダに戻っています。

本書の中で、古今東西の食糧帝国の成立条件として、農産物生産者が自身の食する量より多くの食糧を生産できること、多くの食糧を売買するための取引手段が存在すること、経済的利益をもたらすまで食糧を保存できる手段があることを挙げ、これらの条件が満たされて初めて食糧帝国として都市の繁栄を享受できると述べています。しかし、帝国といわれるような影響力をもつ国・集団が、都市部の人口とその繁栄を支えるために、食糧交易と食糧収集の距離を拡大させ、その結果、自らの地域だけでなく、周辺地域における耕地開拓のための森林伐採、耕地

の土壌劣化を起こし、食糧生産の減退等から徐々に社会の混乱と争いを生じさせ、古代ローマや中世ヨーロッパ等のように、衰退と

崩壊を招いたことを述べています。そして、19世紀後半まで、食糧生産の多寡に規定されてしまう人口、そして、人類の文明・国家・集団であったことを示唆しています。人口と食糧の関係を論じたマルサスの人口論に通じる現象であったといえるでしょう。

本書の第一部は、古代ローマ、中世の修道院を例にした食糧帝国の盛衰とローマでのビールやクレタ文明のワイン等の発達、第二部では、農耕・灌漑からメソポタミア・中華文明の発生、窒素肥料、冷凍・冷蔵技術の発達について、第三部は、植民地支配と茶等の地域的に特化された品目、フェアトレード等について書かれています。本書における現代の環境問題や現代の食品企業に関する記述は皮相的な面はあるものの、歴史における食糧への視点は興味深い内容になっています。

化石燃料等による動力の確保によって、食糧に関わるすべてが、先進国だけでなく、経済成長に伴って途上国であっても、広範囲かつスピーディに動くようになる一方、大きくエネルギーに依存するようになっていきます。今後、近い将来における食糧の危機は、綻びはあるもののおそらく存在せず、20世紀以降の技術革新によって、エネルギー供給に不安のない状態であれば、食糧問題は比較的容易に乗り越えられるでしょう。ただ、百年程度の単位で歴史的に俯瞰すると（数十年単位かも知れないが）、技術革新が継続しても、歴史の教訓によって示唆を受けなければならないことを本書は示しています。すなわち、エネルギー等を大量に確保し、それをベースに開発された技術力が利用可能な時代のみ、食糧が人口を規定する時代を乗り越えられる可能性があり、その前提が崩れたときに、食糧が人口を規定する時代へ戻りうることに對して、持続可能性という言葉だけでなく、現代の蓄積された智慧が試されるでしょう。